

やくしまに暮らして

ネイチャーガイド 大野 睦

番外編

ひよんなことから実現した巻末座談会を終え、自身の幼少期からの育った環境を振り返ることになった。

■幼稚園時代

ベビーブームに生まれた私はまず公立の幼稚園に入園出来るかどうか抽選であり、見事にハズレを引いてしまったらしく近くの私立の幼稚園に入園した。その幼稚園で過ごす2年間、私は自閉症児として扱われている。毎日のように送り届けてくれた母に泣きすがり先生にご挨拶の出来ない子供。

今その当時のことを思い出そうとしても本当に記憶にあることなのか、またこんなことがあったんだと聞かされてきたから知っているのかわからないことも多いが、ふたつの出来事が鮮明に記憶に残っている。

幼稚園での2年目つまり年長になってからも朝の「おはようございます」が言えない。ある先生が私を叱り、年少のクラスへと連れてゆく、泣きわめく私、というシーン。それがひとつ目。もうひとつは何のきっかけだったのか突然そのご挨拶「おはようご

ざいます！」を口にする。先生が泣いて喜び抱き締めてくれたこと。

今思い出しても、どうしてそれほどまで嫌だった幼稚園に私は通い続けたのだろうか。その記憶はあまり蘇らないので数年前母に聞いたことがある。行きたくなかったら辞めても良いよ、と家族で話し合ったという。それでも私は行くと言ったのだと。母曰く、一人だけ私が心を開いていた先生がいたから楽しいこともあったのではないかと。ただ、母にとっては他の先生方からもいろいろ言われたりして良い思い出のない2年間だったようである。親の心、子知らずで30年後に知った事実。道理で当時の写真がほとんどないわけだ。

■小学生時代

同じ幼稚園から同じ小学校へ入学する友達がいなかった私は、幼稚園時代からの人見知りの激しさをかかえての低学年時代。2年生くらいまでの記憶が殆どない。覚えていることと言えば給食を食べるのがとても遅くて昼休みに外で遊ぶことが出来ず一

人で食べていたこと。3年生くらいから少しずつ楽しかったことが思い出される。ようやく友達が出来てきたのだろうか。卒業する頃にはすっかり今の私から想像出来るような活発でちょっとゴンタな子供になっているが、それまでにはとても寂しい日々があったのである。

■石原先生との出会い

今回、私たち元教え子の願いを叶え座談会に応じてくれた石原先生との出会いは5年生の時。それから2年間石原学級で過ごした私は、小学校の時の思い出のほとんどがその2年間にある。私たちの学校、学年には障害児が複数人いた。石原先生は、その彼らとの付き合いを真正面から私たちに問いかけ、また様々な提案、チャンスを与えてくれた。その度にクラスでは話し合う時間があり、個々の自主性もさながら個性が明確になる。いろんな出来事が今でも鮮明に記憶に残っている。それを先生はドラマ作りをしたかったと云う。確かに、30年近く経った今でも当時のことはドラマの1シーンのようにひとつひとつ思い出される出来事ばかり。障害を持つ同級生と私たちと同じ時間を同じように過ごすためにはどうしたら良いのか。同じクラスの同級生の中には障害を持つ友達と積極的に関わる人もいれば避ける人もいる。そんないろん

な気持ちをぶつけ合って過ごした2年間の中で私は自分の意見をはっきりと言えるようになったと感じている。私は自分の当時の石原先生は今の我々の年齢くらい。今の私が小学生に、またその親に向き合えるだろうか。今回の対談は今の自分にもまた大きな刺激を与えてくれた時間となった。

■小学校を卒業後

記事の中にもあるように中学生になった私たちは同じように過ごして来なかった隣の小学校からの同級生との温度差など環境の変化により葛藤が生まれている。今となってはそれが今の社会の現実なんだと思いき知らされた時なのかもしれない。

長い年月を経て今、当時のことを思い出しながら今私たちが出来ることは何だろうか。それは当時の私たちの思い、先生の思い、それをあらためて問い、知ることで今があることを多くの人に伝える、ということでした。

ここに対談を提案してくれた同級生の千葉くん、きっかけを与えてくれた鶴谷さん、教え子の無茶ぶりを受けてくれた石原先生に心より感謝いたします。ありがとうございました。